

ふるさと再発見!

vol. 6

ほらほらわかやま

HOUBO

WAKAYAMA



FREE

巻頭特集

紀州古代墨

●紀州の歴史・文化
徳川治宝侯が愛した瑞芝焼

●散策
粉河でぶらり犬樹めぐり

●施設紹介

図書館探検隊

司書が選ぶ郷土の本

シリーズ道の駅

「みなべうめ振興館」



表紙の書：紫舟【シシユー】

書道家。六歳から書始める。書の本場奈良で三年間研鑽を積み、のち東京へ。NHK大河ドラマ「龍馬伝」をはじめ、外務省「APEC Japan2010」、ハリウッド映画「エアベンダー」やSUZUKIアルトCMなどに作品を提供。朝日新聞や読売新聞でも長く書の連載をもつ。海外では「パリコレ」への作品展示や国際会議での招待公演、国立現代美術館での展示など幅広く活動。書「龍馬伝」で第五回手島右衛門賞を受賞。

http://www.e-sisyu.com

photo by T.Kurimoto

紀州 古代墨

消滅と復活、古の墨を訪ねて



しょうえん
松煙の原料となる松が豊富だった紀州。当時の墨作りとはどのようなものだったのか。紀州古代墨の歴史をたどってみる。

この墨

いか程のものぞ

試みよ

紀州では、いつから墨作りが行われていたのだろうか。

建長6年（1254年）に

伊賀守橋成季によって編纂された「古今著聞集」に次の

ような説話が残されている。後白河院が熊野詣で、藤白の宿に着いた時のこと。紀伊の国司（現在の県知事にあたる）が松煙墨を献上したところ、後白河院の「この墨いか程のものぞ試みよ」という言葉に、御前に居た左大臣が



古今著聞集

すみ
墨は、煤と膠を練り固めて作られる。煤は不完全燃焼を起こした際に煙の中に生じるもの。膠は動物の皮などから抽出されるゼラチン質。煤は松を燃やしてとる松煙、菜種などからとる油煙に大別され、近年では量産しやすい重油からの生産もされている。松煙墨や油煙墨は現在、ほとんど作られていない。当時の墨作りとはどのようなものだったのだろうか。

墨は石墨にはじまり、墨丸そして、松煙と進化してきた。松煙は紀元前200年ごろ、中国で現在の墨の原型といえる墨ができた。その墨は漆で固めたものだった。その約400年後、膠で固めるという現在の墨と同じものが作られるようになった。

日本には、推古天皇18年（610年）に高句麗の僧・曇徽が製紙・製墨の技術を伝えたという記録が残っている。

右大将に薦められたところ、右大将は碗を引き寄せ、墨をすつたが、そのすり方が除目（大臣以外の官吏を任命する儀式）のとおりであったので、左大臣が感心したという。

後白河院の熊野詣は永暦元年（1160年）に始まり、建久2年（1191年）まで34回に及んでいるが、このころに国司が献上するほどの出来であったということ考えると、1000年ごろには墨作りが行われていたのではないかと推測される。



取材協力 平岡繁一氏
海南で作られていた藤代墨を復元し、現在も体験授業などの活動を通じて墨作りを伝える郷土史家。
お問い合わせ
かいはん夢工房
海南市名高533の4(1番街)
TEL 073-482-5572

する墨のその藤代の秋かけて
たえぬ七日の梶の玉づき
あふことと松にかけたる藤代の
墨の名しるるき梶の玉章
冷泉為重

幾千歳松にかけたるたかき名も
なお世にしるるき藤代の墨
冷泉為久

「紀伊名所図絵」によると、当時の藤代墨は墨屋谷（現在の藤白神社の南東）と呼ばれる場所で作られていたとされる。熊野詣の入口にあたるこの場所では、宮人や歌人がその様子を眺め詠んだ歌も残っている。

寛保2年（1742年）京都の冷泉家より紀州藩に「古歌に詠まれていた藤代の墨はどうなっているのか」との問



藤代墨（海南歴史民俗資料館）

い合わせがあった。しかし、墨作りはとうに絶え、知る者もなく、調査されたということが名高専念寺の全長という僧の「名高浦四囲廻見」に記されており、湯浅に残っていた二つの古墨を提出したことが「速水見聞私記」に墨の型とともに記されている。



梅仙墨（海南歴史民俗資料館）

その後、紀州藩の六代藩主徳川宗直が当時の湯浅村に住

む橋本治右衛門に藤代墨の再興を命じ、紀州藩の公用品とされ珍重されるようになった。また、このころは「藤代墨」から「藤白墨」へ、原料も松煙から油煙へと大きく変わった。

この藤白墨も天保13年（1842年）に廃絶した。

その後、明治初期に入り田辺の鈴木梅仙が藤代墨を研究し、「梅仙墨」として名墨を残しているが、梅仙没後途絶えてしまった。



明治時代の墨作りの様子



春日神社 紀州松煙墨の書き初め

海南市にある春日神社は、朝廷より正一位を与えられた格式の高い神社で、聖武天皇から代々の祈願所として厚い保護を受けていた。熊野古道の休息するところに設けられた九十九王子社のひとつである「松代王子」が春日神社に合祀されており、ご神体はなぎの葉の形をした墨だそう。



松代王子が祀られているお社のご神体は「なぎの葉」の形

春日神社では、「紀州古代墨席上書初会」という小中学生を対象とした書き初め会を毎年元旦と2日に催しており、松煙墨を墨汁にしたものを使って書かれます。

松煙墨で書かれた書は青みがかった艶のない黒色になり、味のある落ち着

いた色合いを楽しむことができ。書いたあと、松の香りが一面に広がるのも特徴だ。この書き初め会は今回で16年目を迎える。松煙墨は、江戸時代や現在など何度も復元されては忘れられてきた。「和歌山が誇る文化の一つなので、まずは地元根づかせたい」と思いこの書き初め会を始めました」と、主催である春日神社の三上秀信宮司は語る。海南市の小中学生には参加が多く、松煙墨の存在は広まりつつあるという。

この書き初め会は予約の必要もなく、当日訪れても大丈夫とのこと。古代から伝わる墨「紀州松煙墨」をつかう感動を味わってみては。



取材協力 三上秀信 宮司
お問い合わせ 春日神社
海南市大野中 577-1
TEL 073-483-7547

紀州古代墨の現代

日本でただ一人、原料の松煙から松煙墨を作り続けている人物がいる。田辺市鮎川で墨工房「紀州松煙」を営む堀池雅夫氏だ。現在の墨作りとは…

松煙作りに使う松には、立木の皮をはいでしばらくおき、松脂がのってきた部分を切り出して使う「生き松」と、自然と枯れた松を切り出す「落ち松」がある。今では松山自体が少なくなったため「落ち松」を集めて松煙を作る。

江戸時代には「障子焚き」といい、障子で囲った小さな部屋の中で松を燃やすことで、障子にたまった煤を集める方法が用いられた。現在は、障子の代わりに目の細かい金網が使われている。



松煙焚き 細かく切った松をゆっくり燃やすことで、煤が生じる。



煤とり作業 とったばかりの煤は空気を含むため、ふわふわしてとても軽い。



膠と練り込む 良質の膠。これを溶かして煤と練り合わせる。



型入れ 墨を成形する木型。堅くて木目の少ない梨の木が使われる。



乾燥作業 灰は備長炭の炭がまからとれたもの。



完成

煤作りは、細かく切った松を小さな炎でゆっくり燃やすことが重要になる。そのため5分おきに松をくべ足すことを繰り返す必要がある。500kgの松を100時間燃やして、ようやく10kgの煤がとれる。ここからゴミを除き、重りをかけて嵩を沈める。

こうして集めた松煙と膠を、乳鉢に入れ時間をかけて練る。そして粘土状になった墨を木型に入れ形を整える。

この木型は一つだけなら誰でも作れるが、量産するためには同じ型がいくつも必要になる。そのようなまったく同じ型を作る職人は現在では一人だけだという。

型から取り出した墨は水分を含むため、灰の中に新聞紙に包んで入れ、乾燥させる。

新聞紙と灰は定期的に交換を繰り返し、半年かけてようやく墨が完成する。手間ひまをかけて作られた松煙墨には、独特の淡い色合いと、特徴でもある滲みが出ることで書道家だけでなく、芸術家にも愛用者が多い。

また堀池氏は様々な色の「彩煙墨」や「油煙墨」、白樺を使った墨作りなど、伝統を守りながらも新たな取り組みに挑戦し続けている。



取材協力 堀池雅夫氏
お問い合わせ 墨工房 紀州松煙
田辺市鮎川字小川
TEL 0739-49-0801